



中原中也とトリスタン・コルビエール

著者	小澤 真
雑誌名	中原中也記念館 館報
巻	27
ページ	5-6
発行年	2022-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017889

中原中也とトリスタン・コルビエール

小澤 真

中原中也の詩を愛読する人にはそれぞれの中也在るだろう。中也のどこに惹かれるのかは実に千差万別だ。私にとつては、詩の内側と外側の軋みとでも言おうか。中也の詩は歌うようなリズム、音楽性が美しく、心地よい。でありながら、その内容はときに自嘲、自虐、冗談めかした苦い笑い、悲哀を伴っている。その落差が悲しげでありながら剗軽な、何とも言えぬ情感を引き起こす。

ところで中也が憧憬を抱いた詩人に、アルチュール・ランボーがいる。ランボーやまたポール・ヴェルレーヌといったフランスの詩人たちに大きな影響を受けていることはよく知られるところだ。ランボーの後期韻文詩などは、歌謡的な詩であり、中也の詩の音楽性に近いかもしれない。

中也は他にもフランスの詩人の作品をいくつも訳しているが、そのなかにトリスタン・コルビエールも含まれている。コルビエールはランボーと並び「呪われた詩人」とヴェルレーヌによって称され

た詩人である。生前に「黄色い恋」という邦題でも知られる詩集「アムール・ジョーヌ」を残し、若くして亡くなった。ブルターニュの詩人であり、海の詩人、また「ひきがえる」の詩人としても知られる。中也はコルビエールを紹介する短い記事ものとしており、それなりの関心があったことがうかがえる²。

ところが、コルビエールの詩には、中也のごとき口ずさむような音楽性とは無縁の作品も多い。かろうじて韻文で書かれている、ほとんど偽の、擬の、戯の韻文である。韻律の規則を守っているように見えるが、口語的な言い回しを多用し、普通では考えられない音綴の数え方をすることもある。造語の多さも韻文のパロディであるかのような印象を強める。

それでも彼には抒情性に溢れる詩群が存在する。とりわけ「のちのためのロンデル」の章に所収される詩群だ。ロンデルというのは Rondó という定型詩の古い形で、旋回するようなりフレインを伴

う。この章の詩はこの形式で書かれており、詩集の他の詩篇とは音楽性という意味でも一線を画す。円環を描くような繰り返しの詩行はまさに中也のそれを思わせる。「よい子は、おやすみ……」という詩を拙訳から引用したい³。

よき晩で！ 眠れ、お前のろうそくの
終わり……

そこへ置いて、いつてしまった。

ひとりでもこわくはないよね、かわいい
そんな坊や？ ……旅籠の褥の燭台だ。

もう恐れることはない、写字生のむち
など、

さあ！ ……お前を起こしはしないから。
よい晩を！ 眠れ、お前のろうそくの
終わり……

少年⁶という詩は、死んでしまった少年

について、第三者（おそらく女性）が語るという体裁の詩である。この少年は詩人の比喩でもある。中也の「秋」を想起させるような詩と言える。

実際のところ中也がどの程度コルビエールを読んでいたのかは不明である⁷。フランス詩の影響を考えるなら、まずランボーやヴェルレーヌ、あるいはボードレールやネルヴァルの名が挙げられるだろうが、しかし中也の詩はそれらに似ているかといえば、必ずしもそうではないだろう。たとえばランボーの言葉の錬金術のような壮大な言語実験の意図、小林秀雄が評するところの「聊かの感傷の痕も持たない⁸」という詩風は中也のそれとは異なる。むしろコルビエールの自嘲的で、おどけた苦笑いを含んだ哀歌、それも死んだ子供を自分と重ねながら悼む歌は、奇しくも中也と響き合うのではないだろうか。

は消えた。——ここにはもう、門番も
いない、
ただ北風が、南風が
聖母の糸を揺らしにくる。
しっ！ ろくでなしには、お前の土は
呪われている。
——おやすみ！ 眠れ。お前のろうそ
くの終わり……

そして、この「のちのためのロンデル」のテーマは、子守唄である。ただし、子供は不在だ。子守唄を聞くべき子供、それはまた詩人自身のことでもあるのだが、彼は死んでしまったことが暗示される。つまり、死んだ自分に対して、詩人自身が歌う子守唄なのだ。

ここに、中也とコルビエールに共通するテーマがあるのではないだろうか。そもそも「在りし日の歌」というタイトルは愛児の死だけでなく、自分の死についても含むところがあるだろう。大岡昇平が言及したように「死んだ子供」と自己の同視があると考えられることもできる⁴。「骨」や「秋」などに見られる中也の詩における「死んだ僕を見て」という状況は、コルビエールもよく好んだ視点である。彼は詩人である自分の「墓碑銘」を、おどけた風情で歌っている⁵。

また、コルビエールの「かわいそうな

の要旨をまとめたものである。
3 コルビエール、前掲、四六三〜四六四頁。
4 大岡昇平「在りし日の歌」『中原中也』講談社、一九八九年、二四七頁。
5 コルビエール、前掲、三四〜四〇頁。
6 コルビエール、前掲、一一二〜一二二頁。
7 昭和八年十一月十日付安原喜弘宛書簡にはコルビエールに言及があるが、極めて限られたものである。『新編中原中也全集』第五卷、二〇〇三年、角川書店、四五六〜四五九頁。
8 小林秀雄「ランボー」『小林秀雄全集』第一卷、新潮社、二〇〇二年、八九頁。

Ozawa Makoto

小澤 真

1977年千葉県生まれ。フランス・ナント大学大学院文学・言語・コミュニケーション研究科文学系専攻修士課程修了。大阪府立大学(2022年度より大阪公立大学)講師。現在は社会福祉学(日仏比較)、フランス語教育を中心に研究している。大阪府立大学の公開講座「ABCから学ぶフランス語」にて一般の方を対象にフランス語の普及活動も行っている。主な著書は「日常フランス語会話ネイティブ表現」(語研、共著)など。

1 トリスタン・コルビエール(小澤真訳)『アムール・ジョーヌ』幻戯書房、二〇一九年、一一〇〜一一二頁。

2 中原中也「トリスタン・コルビエールを紹介す」『新編中原中也全集』第四卷、二〇〇三年、角川書店、一一五〜一二八頁。Rene Marineauのコルビエールを紹介した文章

Nakahara Chūya et Tristan Corbière